



自：昭和 55 年 2 月 1 日
至：昭和 56 年 6 月 6 日

【病床日誌・メモ】

<昭和 55 年初春> (中野病院入院時)

・主治医の荒井医師への質問メモ

- ① 癌ではなく肺病（結核）ですね？
- ② テストの結果は？
- ③ この病院への入院目的は？治療薬の選択か？
- ④ 睡眠薬の服用限界は？
- ⑤ 6 人部屋の団体生活なので 鼾&咳患者が多いし、安静してられない。

・ 3/24 ;

午前 レントゲンを撮る。

午後 荒井先生より 話を聞く。

入院して二週間余は既に腎機能、アイソトープ、針生検などのテストを受け、肺機能のテストも終わり、針生検の結果待ち。結果次第により又 気管支造影その他 結論が出るまでは 尚数日かかることとの事。肋膜炎が癒着している。

六人部屋。何れも七十歳以上の方々。美濃部都政の謳歌組で御座いまして 福祉のあり方に疑問・矛盾を覚えています。ご報告までに。

・ 3/30 ; 昨夜の雨も晴れて窓外が春気配。

・ 3/31 ; 六人の雑居部屋から二名になり、静かで綺麗な空気になりゆっくり休める。相変わらず造影剤の後、熱が高く 寝汗をぐっしょり掻く。気持ちよし。昨夜は何と八時頃より消灯。昨朝六時の起床。

対角のベッドにいる七十七のおばあさんは眠り続けている。お相伴するのもしんどい。長命の人は矢張り寝られる人と云うことをしみじみ感じる。兎に角食べては寝、それも放心状態。羨ましい限り。

愈々 明日は最後の天王山。気管支内視鏡のテスト。これで万事終了なるも、昨夜の熱と咳が気になる。

・ 4/1 ; 外泊 (注 ; 自宅へ)

・ 4/7 ; 一週間の外泊も終わり、主人の出勤の車🚗に乗って八時半家を出る。昨夜来の大風もなく、雲間からの春の気配。木の芽も吹き出し、庭先は春の気配に満々ている。

横浜新道から第三京浜、環七、環八に出て十時半頃病院に着く。早速レントゲン。荒井先

生の御診察。昼食も夕食も平らげ、九時就床する。

愈々明日は気管支内視鏡。熱は六度二分。

・4/8；六時半起床。

<病院にて>

テストテストに 明け暮れ明け暮れ
我が体力の力強さよ

花嵐吹きすさんで今は三日
予報外れも今は茶飯事

今宵 又 夕闇迫り
灯火も灯り

眠れ 安かれと祈る
我が胸

しらしらと 夜のとばりの
もるる頃

<自宅療養>

春の陽に月桂樹の花のウコン（鬱金）色
これほど見事と我も驚く

この花姫の雨来か 空の碧さと
競う木蓮

春の宵 菜の花あわく
陽は落ちぬ

・5/7（水）☀️晴れ；

病院に行く。相変わらず混んで……。五時前に少々頭痛と微熱 可もなく不可もなく。
中々しつこい病気であるが 心臓が小さくなったのが救われる。
紀代の自動車🚗で帰るも疲れが出てぐったり。

主人が夕食を作ってくれたが 誠に不味。論外の不味。
風呂に入る元気もなく寝込む。眠剤を飲んだので熟睡八時まで。目さめよく。

・5/8 (木) ☁曇；

昨夜ぐっすり寝たせいか頭すっきりした。一日中静養したので働いたが別に疲れない。国立病院の新井医長から手紙来る。字の下手のことに驚く。文面は人間の良さが感じられるが医師とは何と非常識な家庭であることが感じられる。

大いに皮肉な手紙を出したのだが余り感じないらしい。社会から良き波長のみ受けているので反応すら感じられないのであろう。兎に角 病気が癒ば良い。

珍しや 蛙の声に
そばだてる

・5/9 (金) ☂；

今日は父上の誕生日 69 歳となる。良くもこんなに歳を重ねたものであるが 意外と元気である。

食事に興味がない人だけにご馳走する気にも起きないが 静かに茶でもすすめるのも良からう。ところが一日中掃除したり落ち着く暇がなく ガサガサ働いているので厭気がさす。ムードがない。勝手に入って皿洗いばかり。楽しいのであろうか。

午後運輸の山口さんから桑山氏の死報くる。桑山氏も長いこと植物人間と噂されていたので 漸く天に召されたのであろう。

一日中 ドシャ降りの悪天候。

・5/10 (土) ☂☀；

午前中は雷雨を交えて悪天候も 午後より青空も見え始め五月晴れとなる。写真機と楽しむ。体の調子は一進一退。微熱続く。

木漏れ日がユラユラ揺れて 裏庭が明るい。夕陽も差し込んで我が家はこの季節が美しい。リラの花も盛りを過ぎ 八重櫻も散った。いび根菌の黄とワイン色の花 そしてカナメの真紅 こて毬も咲き乱れ つつじの紫赤が庭を引き立てる。

・5/11 (日) ☀日本晴れ；

一日中 五月晴れの素晴らしい日。午前中 紀代より☎。相変わらず微熱続く。

主人も相変わらず掃除に余念がない。丹精したスマレを 又 雑草と間違い すっかり抜かれて 再々のことであり 腹が据え兼ねる。どうして草花に対して愛情がないのであろう。面白みのない男だ。

・5/12 (月) ☀️ ;

珍しく朝 熱がない。紀代、万里来☎️。

午前中 静子から☎️あったようだが話したくないので切る。英一より☎️があったが話したくないので出ず。百合はくどくど言っているのどうささい。

久し振りに風呂に入る。連日眠剤を飲むのでよく眠る。

・5/13 (火) ☔️☀️ ;

朝から雨、午前中は嵐のような風。多分日本海を低気圧が通るのであろう。午後より陽射しも出る。早苗に茶送る。

・5/14 (水) ☀️ ; さやかな五月晴れ

主人はいそいそと🏌️ゴルフ場へ。十機会の連中と霞ヶ関ゴルフ場🏌️へ。

万里が手伝いに来る。鰻重を食べる。

午後 柴田院長より病気に就いて報告。「非抗酸菌が陽性」出て 並の病気でないらしい。成る程 薬が効かないはず。どうすれば良いのか 自立療養と言う事だろう。

・5/15 (木) ☔️ ; 一日中雨

中部夫人来宅。午前中 中戸川さんより☎️。早苗より☎️。英一より☎️。

血痰激し。

・5/23☀️ ; 五月☀️も風強し。

夕方より寒気が出て 熱が出る。相変わらず血痰。

医学書をヒモ解く。ガンではないだろうか。それとも風邪の後遺症か。止血剤を飲む。

中戸川さんに☎️して 礼を言う。

・5/24☀️ ; 五月☀️なるも風強し。

鉄線の花も散り始める。

・5/29☀️☁️ ; 久し振りに早起きす。

浅みどりも深みどりとなり鬱陶しいほどの庭先になったが、矢張りみどりに囲まれた我が家は素晴らしい。

年のせいか目覚めが早い。

裏のグラウンドから我が家を一周すると朝の冷気がヒヤリと葉緑素でむせ迫るほど爽やか。

気分も大分宜しい。サボテンが咲き出す。暫く五月晴れが続いているので 午後から☁となる。風呂に入る。柴田先生よりの📞。

・5/30 🌧️ ;

今日は五月も三十日。月日の流れの速さに驚く。

気分宜しいので二時間ほど 散歩したり掃除したりしたが 疲れる。六度五分。

九州はつゆ入りしたとか、関東地方もつゆ入りだろう。しとしとと降り続く。四ツ葉のクローバを見つける。

つゆ入りか しとしとと
降りつづく

今年も又 梅の実のこぼれるほどの
当たり年

・6/1 (日) ;

大分気分も宜しくなり 勝手に料理等をしても疲ない。たまに時々血痰と百日咳の様な咳は出るが 気分は悪くない。風呂に入る。気分良し。

午後 万里訪れる。夜 百合より📞、ネックレスの件。ゴザ届く。

・6/2 (月) ;

つゆ空、部屋の中は湿気を感じる。ヒルは一時五月晴れ。

洗濯などしても疲れなない。この調子では病人らしくない。衣更えをして気分を変える。風は少々強いが爽やか。ニンニクの醤油漬けを食べてみたが美味しい。

<初夏>

つゆ明けて ゆゆる暑さや
大暑かな

早起きの鳥に誘われ
窓明ける

東雲の空刻々と
しらみたり

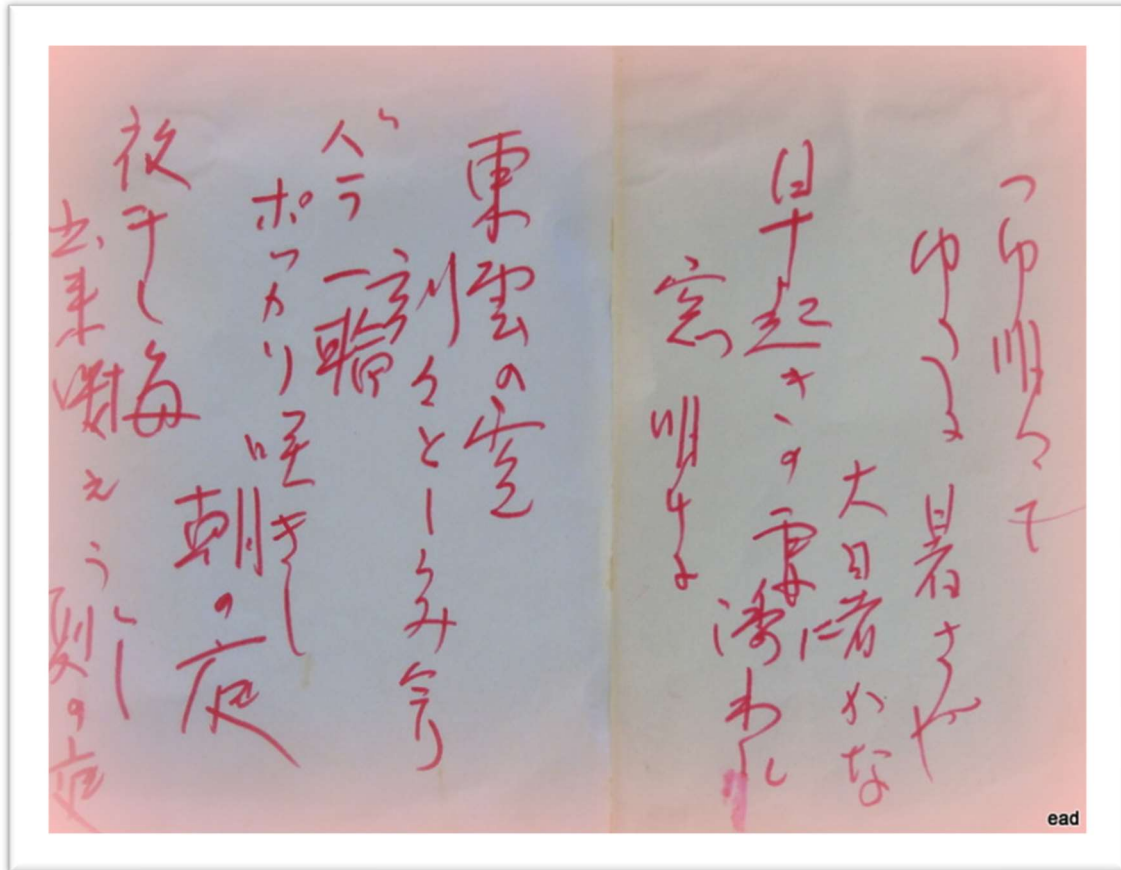
バラ一輪

ポツカリ咲きし

朝の庭

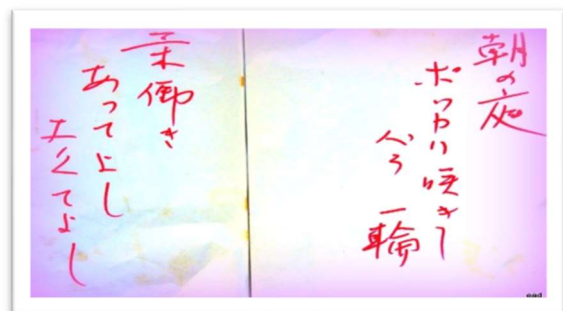
夜干し梅 出来映え うれし

夏の庭



気働き あってよし

なくてよし



<8月28日の句>

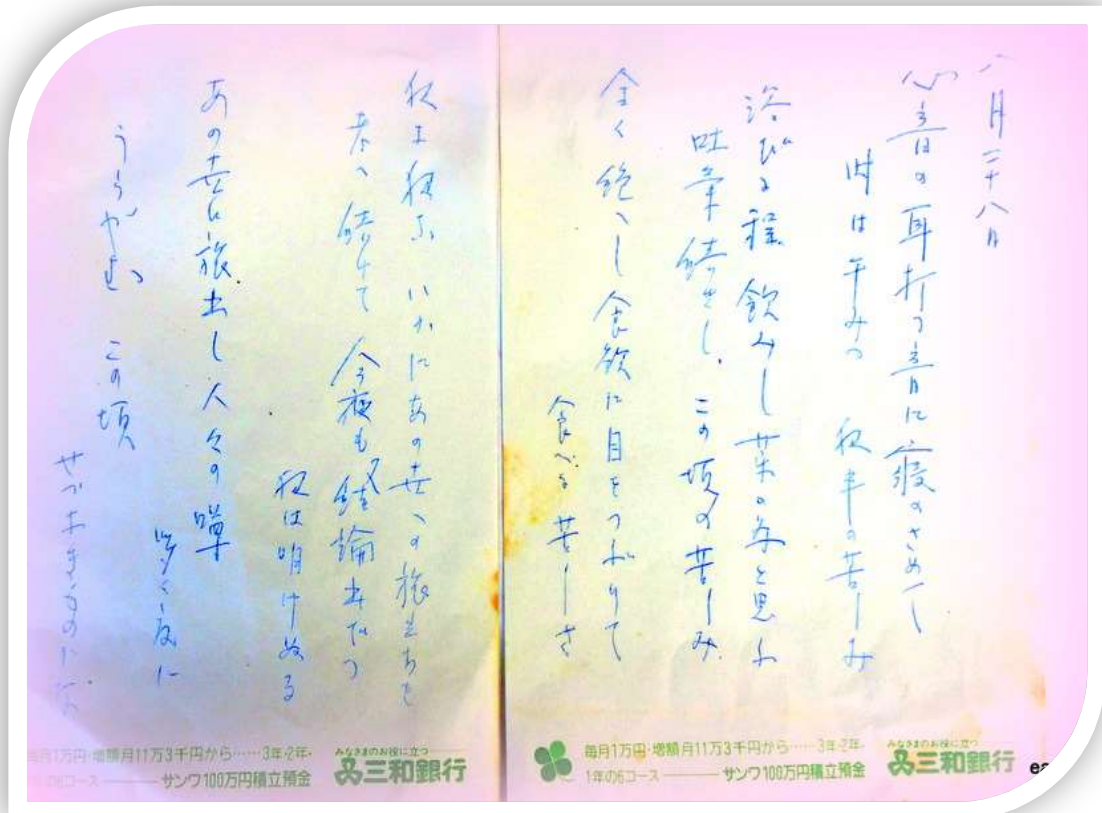
心音の耳打つ音に寝のさめて
時はすすみつ 夜半の苦しみ

浴びる程 飲みし菓の為と思う
吐気続きし この頃の苦しみ

全く絶えし食欲に
目をつぶりて 食べる苦しさ

夜よ 夜な 如何にあの世への旅立ちを考え続けて
今夜も 又 結論出でず夜は 明けぬる

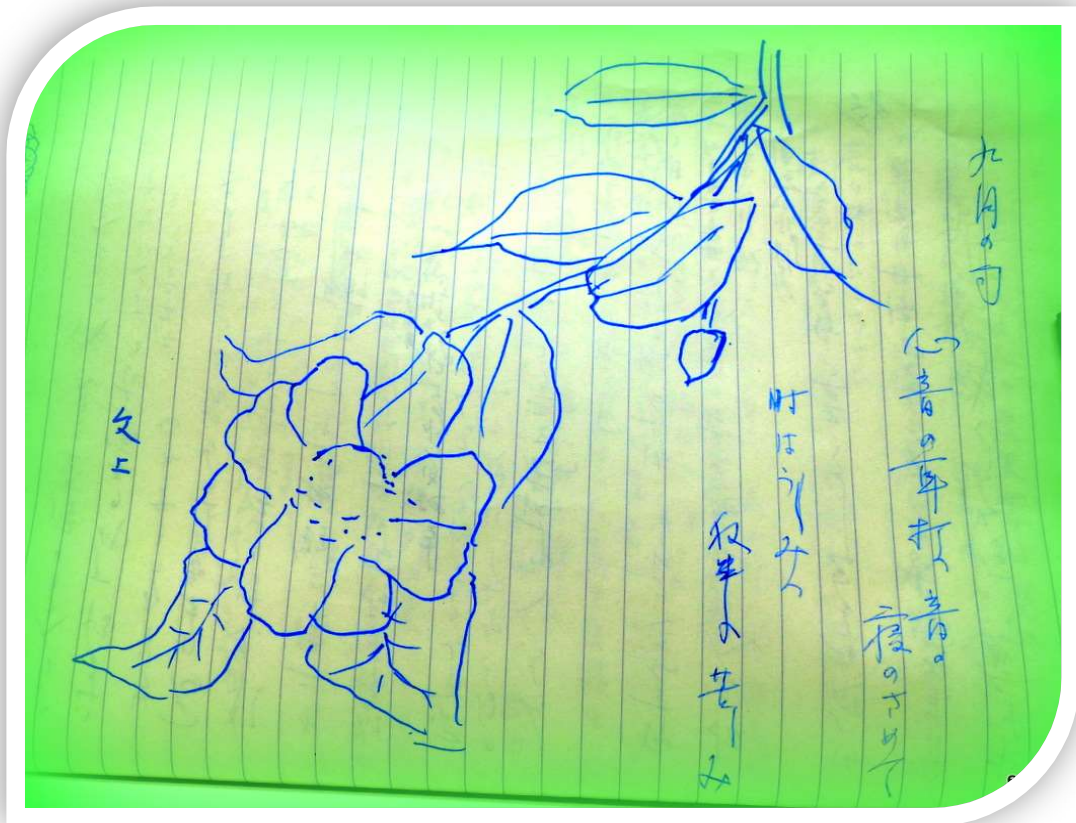
あの世に旅出し人々の 噂聞く度に
うらやむこの頃 せつなきものかな



<九月の句> ;

心音の耳打つ音の
寝のさめて

時はうらみつ
夜半の苦しみ



<十月の句>

秋台風 夜半の嵐 雨足しげく
戸をたたく

湯上がりや 病忘れて
心地良さ

病みてより 指折りすれど 九ヶ月
秋もあせれり 今日この頃

山茶花の花盛りなり 秋の 00

今日は良し 昨日悪しと 誘われしか
あの世へと旅立ち間近と覚ゆ

ハラハラと木の葉の散って 秋は逝く

野鳥来たりて 我慰めしくれはせど
吐気 苦しく 庭に立つ勇氣なし

空晴れてゴルフに行くと勇み立つ
我が妹の君の幸 嬉しき

秋風にハラハラ落ちる木の葉にも
秋の風情の爽やかな季節

00 妻 0000 のざさめきも 健康こそと
そそる悲しむ

梅もどき 今年も赤き実をつけて 深み行く秋に
色漬けにけり

いつ頃かと 辛夷の花の咲く迄は
我もこの世の人でありたし

虫の音もか細きなりて
秋深し

静けさや ポトリと水滴
秋の夜

山茶花
黄金の花を散らして
秋深む



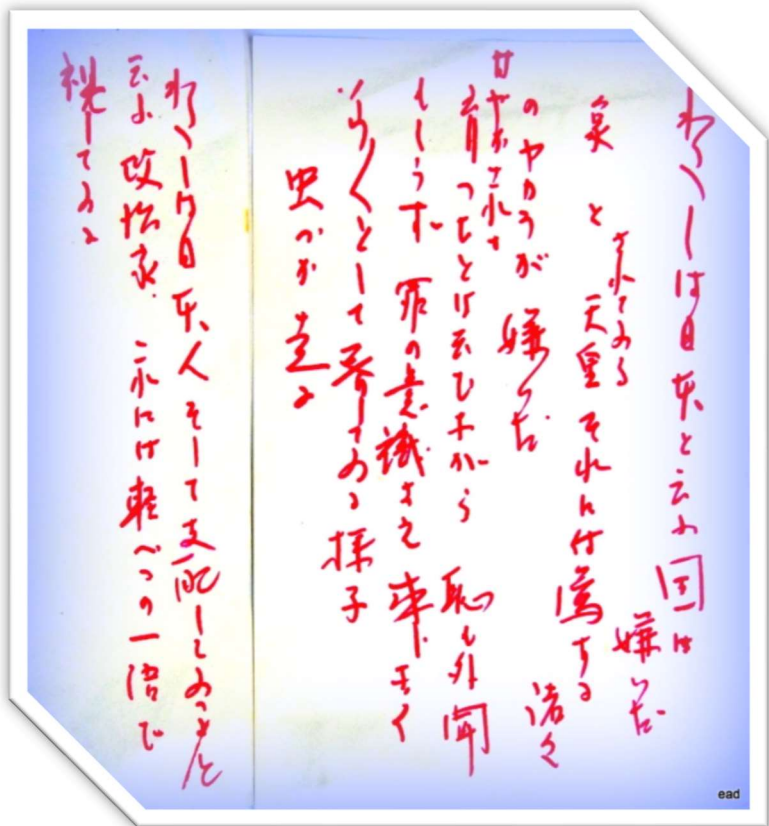
<00月00日>

わたしは日本と言う国は嫌いだ。

象徴とされているそれに附属する諸々にヤカラが嫌いだ。

甘やかされ育ったと言いながら 恥も外聞も知らず 罪の意識さえ感じなく ノウノウとして生きている様子。虫唾がはしる。

わたしは 日本人そして支配していると言う政治家、これには軽蔑の一語で視ている。



・10/7；

木犀の香が屋敷内に漂い 空はあくまで澄み渡り 秋の日和である。

遠く 近く 打ち上げ花火が聞える。多分 運動会の開会の合図であろう。患ひし我が身もこの自然の恵みに気力が湧く。裏庭でジョギングをしたい。併しこの体では許されない。裏庭の木の葉がチラチラと落ちる。

秋タケナワとはこの日の為の言葉であろう。こんな良い日は滅多にない。

むかしは 菊の香高きと申したが菊の乱れ咲き (注) は見られない。

(注；道端や山道の野菊が、野のように乱れ咲く様)

主人が盛んに庭の手入れに余念がない。

秋日和 我も翔んで見たい
日和かな

・10/10；

「釣瓶落としの秋の空」とか。病む身にとっては誠に淋しい晩秋である。今迄 茜色の夕陽に明日の胸を会うにのせたものであるが 今はその情感も湧かない。

医師に病を宣告されて以来 九ヶ月。病との戦いにそして、心との戦いに 明々 黄昏た日の事が夢のように。

二月一日の思いもよらぬ病の宣告。断層写真十二枚、連日レントゲンの検査。少しも病気がらしくない自分の体の何処かが蝕まれているのであろう。実感も湧かない 併し医師は重大な病気として急遽入院のすすめ。尚しても実感の湧かない、何処も何もない。只 胸の何れかに病巣らしきものと。

併し 私はすぐに入院など思ってもないという自身。医師の投薬は大量に体内に入る。段々体がおかしく蝕はれてきた感じ。いたし方なく三月十八日入院。

個室と云っても北側の全くの獄舎の様な部屋、病室は満杯との事。どうしても自分では病気ではないと信じているので一応断る。併し、メンツもあり泣く泣く入院、入院生活が始まる。先ず 食欲不振、不眠症と次第に精神病的様相となる。眠れぬ夜の苦しみ、睡眠薬に対しても副作用意識があるので承服しない。

併し もう体などどうなってもよろしいと言うフテクサレから睡眠剤を飲み始める。矢張りぐっすり眠った朝は気持ちが良い。

ストマインの注射、抗生剤の注射と連日の投薬、体は益々蝕ばれて行く感じ。院長も考え始める。只の病気ではない事を。

咳もなく痰も全くない。気管支に管を入れて咳を出す騒ぎ。数回の検査にも菌は出ない。

黒沢元院長も来院。相変わらずタイコをたたいて帰る。

院長もどうすることも出来ず。東京国立療養所中野病院の院長を尋ね、早速三月十二日、主人、万里同道、中野病院に入院。決定した部屋は相変わらずの北側の陰気な部屋南側の大部屋に入る。愈々入院生活に入る。

そしてテストテストに明け暮れ。一ヶ月と七日位入院し、退院。

この部屋は七十歳以上の人が多く、全く食事代 全て無料。福祉の行き過ぎを痛感する。渡り鳥患者らしい人もいる（秋入院 ぬくぬくと冬を過ごし 春退院）。家族も喜んでらしい。これではいくら税金を納めてもたまったものでないことである。代議士奴の票集めの一駒であろう。皆平素は元気だ。人生の哀感を感じる。

幸い 婦長が気さくな婦人。看護婦も中々大変な仕事である。白衣の姿にテレビで見る最近の歌手などと比べ様もない美しい娘ばかりである。お下の世話からどんな仕事も厭な顔一つなく立派である。日立の看護婦と比べ教育は、宜しいようにと感じられる。

私の主治医は荒井先生。東北大学出の優しい先生で感じが宜しい。尤も彼の父親は日立の元重役荒井氏の息子と聞く。

私は全く優等生の患者で手が掛らず。連日の検査にファイト満々。腎機能からレントゲン、心電図の月並みの検査から始まり肺機能、気管支造影、気管支鏡、アイソトープ、針生検、気胸驚くほど酷い検査が続く。何回の菌検査も菌はなく たいした事もなく 自宅療養で充分として 四月十六日退院。ホットする。

体の調子も別に悪くなく 日立病院に時々行くと言う事で 事無を得る。

四月下旬 中野病院よりレントゲンが届く。日立病院に行き 日立なりの治療を始めてから 急に病状悪化。食欲不振と加えて吐き気、血痰を見るようになる。相変わらず不眠は続き 再度入院を先生は主張する。

本年は七月も八月冷夏なるも 体の調子は益々悪化。業を煮やして 日立に見切りさえ感じ お茶の水のクリニックの門をたたく。自然食療法をはじめ。玄米食に切替えたり 諸々の自然食を求め帰宅する。日立の先生とは真っ向から診断が反対。何れが宜しいか判断に苦しむ。暫く自然食療法も副作用なきも この療法は循環器系統には宜しいが、呼吸器系には余りいみがない事に気付く。

それに べら棒に何もかも値段が高く 森下と言う医師も余り信用出来なく 良きを取り、悪しき捨てての状態。

七月初めから、一日おきに注射（BCG）と点滴をはじめ。

一進一退 良かったことも思われず 食欲不振のまま今日に至る。後は運命。天に任せる

より仕方ない心境。

患みてより 拷問の数々 九ヶ月
我も あせれり 今日の この頃

延命夫妻と息子来訪 万里が手伝いに来る。

10/14；

秋風のUターンが始まり 愈々 秋も深まった。沖縄からUターンした台風が九州・四国と報じたが 関東沖を通過。大したこともなく無事すんだ。明日は秋晴れとか。

10/18 (月)；

襖の張替えも終わり 思ったより部屋が綺麗になる。今日は応接間のクロスの張替え。主人はゴルフに大厚木に勇んで行く。私は一人。胸苦しき続くも 昨日医師の診断はよろしいとの事。勇気を出す。うらのグラウンドでは若者達の野球のざわめきの声。

山茶花の花が見事に咲いて薔薇の花の様。手も掛けないのに自然に美しい姿を見せてくれるのは有難い。

秋空の青色と木の葉の黄、梅もどきの赤い実。誠にコントラストの美しい色彩である。ああ 健康あれば何処かに行きたい。

そろそろ早苗より松茸も届くであろう。

10/19；

紀代の車🚗で病院へ。帰宅して子供達にバナナ・ジュースをミックスして作る。美味しい・美味しいの連発。健康なことは宝物に等しい。

00月00日；

今年も 又 月桂樹の蕾が初春と言うのに沢山付けて 四月には黄色の花を見事に咲いた。月桂樹と言うと王冠を思い出し、ギリシャのイメージを思い出し、花については凡そ色さえも想像し、期待もしなかった。

これは山田のお爺さんが持って来てくれたので、裏庭の片隅に植え しかも陽の当らぬ条件の悪いところに何の気なしに植えたのに十有余年経て見ると 物の見事に成長して目を見張るようになった。

それにしても山田のお爺さんも天国に召されて何年位になっただろう。話し好きの自慢屋の お人良しのお爺さんだった。

時折 夕陽が綺麗と言うので訪れると喜んで話を弾ませた。政治の話、世間の話、そして彼の一番自慢の種は 東大出の息子と娘の話をする時は幸福そのものであった。妻君のお婆さんは大変賢い人で 子供達が立派なのは この婆さんの賢さからと思った。

併し 息子は東大出ても 余りパットしない人物のようで ある銀行の格は支社長の何か頂天と思われる。

ある日突然この老夫妻は息子と一緒に東京に引っ越した。いろいろ事情はあろうが東京に住居を構える為には 資金欲しさに売り払ったと聞いた。この売買にも 隣の浅川商事の罠に掛ったと悔やんでいた。

東京に引っ越して間もなく あの賢い老婦人が天に召されたと聞いた。気の毒なことがある。ある日 近所の奥さんと悔やみに伺った。老妻に先立たれた淋しさは筆舌に尽くせないほどに哀れであったが、息子の作った家を自慢そうに案内する姿は これ又 哀れみを感じた。やがて彼も脳軟化で 何れかの病院で息を引き取ったと聞く。

月桂樹の花は綺麗で 予想外の美しさではあるが この爺さんの事を思い出すと、東大出の息子・息子で喜びを保ったのであろう。併し 憐れである東大出には ヘンプラが多い。

東大に入学した時が親孝行なのであろう。

<00月00日>；(この稿は 礼状の下書きと思われる(昭和55年秋))

秋も愈々深み行く様相と感じられ出しました。

齊木工場長はじめ 工場ご一同様のご健勝をお喜び申し上げます。

扱 只今は 御地名産の梨子を送って頂き ご高配の程誠に嬉しく 厚く御礼申し上げます。いつも何時もご配慮を頂き厚き御心入れのことと重ねて御礼申し上げます。

主人は 下館工場建設の仕事の拝命を受け、当初は掘立小屋が二棟と假事務所一つの前に佇みし感無量の時を思う時(尤も日立製作所も掘立小屋よりの経営と聞いておりますが)、歴代の工場長の優れた采配により今日の隆盛を見、誠に主人も これ又無量を覚える事でしょう。

厚きご厚情に一層感激しております。家族一同賞味させて頂いております。

<昭和 55 年晩夏～晩秋>

病む身には 00 淋し虫の声

臥してみる

夕月楽し冷夏かな

病みてより

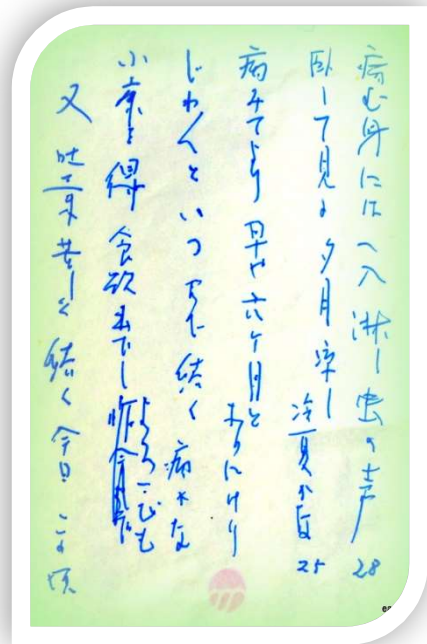
はや六ヶ月となりにけり

じわじわといつまで

続く病かな

小康を得 食欲出でし よろこびも

又 吐気苦しと 続く今日この頃



瘦せたしと心掛けつつ数十年

今はしわしわ 見るも悲しき

ゴルフ日和が空晴れて

勇み立ち出て行く主の心うらやまし

優しさとうっかり主人の性格に

有難さともどかしさと同居のこの頃

野鳥来たりて 我 覚ざめど

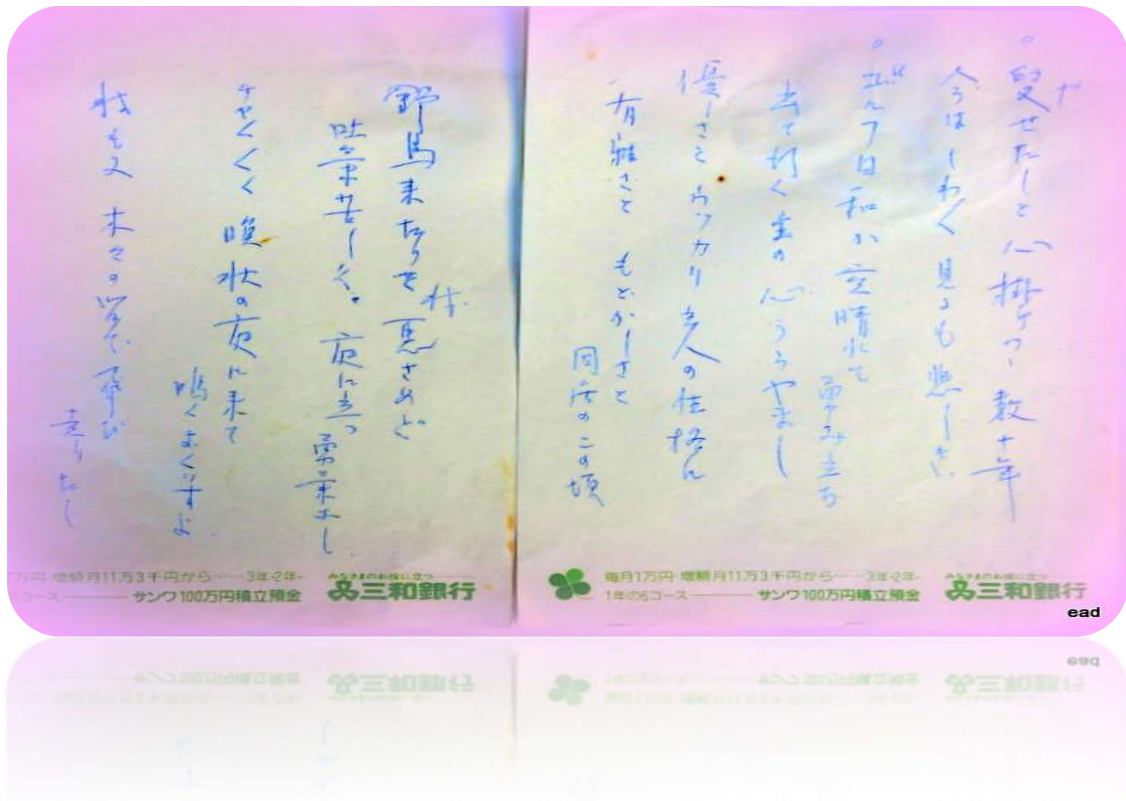
吐気苦しく 庭に立つ勇氣なし

チャチャチャ

晩秋の庭に来て 鳴く 000 よ

我も又 木々の間で

飛び走りたし



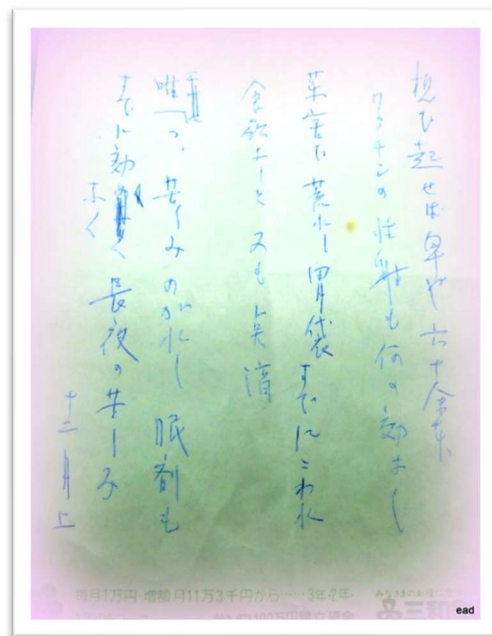
<昭和 55 年 12 月上旬>

想ひ起こせば 早や六十余年
 ワクチンの注射も何の効なし

薬害で荒れし胃袋すでにこわれ
 食欲なしと又も点滴

唯一つ苦しみ逃れし眠剤も
 すでに効なく 長夜の苦しみ

(これ以降のメモ書きは 半年後(6月4日;八王子病院)の
 死の直前の下記絶筆のみ)



<昭和 56 年 6 月 4 日>

幸せな一生でした

良き夫と 親孝行なこどもたちに そして余りにも可愛いき十一人の孫

何の不自由もない私が死を急ぐのはガマンのない奴と思いでしょ

併し 連日の苦しみ そして奇病でしょうか さしたる手段もない病

私の病気によって 家族一同の生活がメチャメチャにするでしょ

幼くして逝った健二の側らにいきます

先立ちをお許し下さい

<父のコメント> 6/4pm4.50 頃 八王子中央病院にて

病床に仰向けで 手が震えて字が思う様書けず、急に思い立った様に便箋とペンを求められ 何か書いた。「読まないで」と云って 手渡されたものである。

尚 健二は昭和 18 年 4 月初旬に誕生。同 10 日に死亡、同 15 日足利市の法楽寺に火葬・埋葬。昭和 57 年 5 月 1 日 鎌倉霊園へ骨壺のみ改葬され安置。命名前に死亡したため、儂い数日の孩子（嬰兒）であった。(注；英一記)

二年を一筆の如
うかき来と、相孝は子儀に
何不由ゆも好ハ私に
思ひてよる 信一 傳月
おししたる平獲も
宗於一月の半惜
おしく 遊長

余の参りハ其大の
余は
持、奴と
持、奴と
持、奴と

私ハ病者ふり
私ハ病者ふり

にさるやうに
にさるやうに

よきものごと
よきものごと

8/4
6m 4.50 頃

於ハ妻子中失病後
於ハ妻子中失病後

病床に仰向す
病床に仰向す

涙ありす
涙ありす

涙ありす
涙ありす

<参考；入院時の医師の所見>

主治医の日立戸塚病院長の柴田俊郎医師、中野病院の荒井医師、八王子中央病院の佐藤医師の所見要旨は下記の通り。

<昭和 55 年 2 月 1 日；日立戸塚病院>

柴田俊郎院長診断書より。「特定の自覚症状なく来院。胸部 X 線像に右肺下野に腫瘍、右肺上部に肋膜肥厚浸潤像を認める」。2 月 13 日；「右背部痛を訴えるも喀痰なし。右肺癌の疑いにて診断治療なす。」

<2 月 18 日～3 月 7 日；日立戸塚病院へ査入院>

柴田医師の診断書より。「自覚症状全くないが、喀痰細胞診で Class3。」

2 月 26 日；柴田俊郎院長→父（輝吉）に「肺癌」である旨通知。

<3 月 12 日～4 月 16 日；精査のため国立療養所中野病院に転院>

荒井他嘉司医師診断書より。「右下肺野に腫瘍状陰影を認めるほか、胸膜は全体に浸潤による肥厚を示している。時に血痰を喀出し、喀痰中細胞診にて異型細胞を 2 回検出した」

（5 月 17 日；荒井他嘉司医師より母宛へ来翰。要旨は「(前文省略) 結果は、矢張り予想していたように微量ながら非定型抗酸菌が陽性に出て参りました。非常に弱い菌ですが、薬剤に耐性を持った菌で、効果は弱いのですが、体力でも良くなるものですので、どうかご安心下さい。ゆっくりとご療養いただければ、必ず良くなりますので頑張って頂きたいと存じます。(以下省略)」

4 月 16 日～；退院後、自宅療養し、再び戸塚病院に外来通院。柴田院長診断書より「血痰が大部鮮明になり、8 月 4 日から丸山ワクチンを使用。12 月頃から血痰増強、呼吸困難ひどく、食欲不振、全身衰弱する。」

<昭和 55 年 12 月 19 日～昭和 56 年 3 月 19 日；日立戸塚病院へ再入院>

担当医柴田俊郎院長の報告要旨。「入院後血痰は続き、呼吸困難増強。一般状態悪化。右肺癌は右肺全野に拡がり、肋膜炎併発、胸痛も訴える。丸山ワクチン療法、その他の対症療法を行うも症状は進行する。」本人・家人の希望で「免疫療法に望みを賭け」八王子中央病院に転院。

<昭和 56 年 3 月 19 日～昭和 56 年 6 月 6 日；八王子中央病院に転院>

佐藤一英医師の診断書より。「中野病院にて手術不能として自宅療養していた。4 月より化学療法として丸山ワクチン使用していたが次第に増悪。3 月 19 日八王子中央病院に入院となる。」当病院の治療は「免疫監視療法」。

昭和 56 年 6 月 6 日 11：30pm 薬石効果なく 1 年 5 ヶ月の闘病の末 死亡。死因は「心不全」享年 66 歳。

以上

文責；足立英一